Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-27

レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキル形成に焦点を当てたいじめ防止プログラムの開発に関する基礎的研究

菱田，一哉

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2013-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5741
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005741

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　菱田　一哉
専　　攻　心身発達
指導教官氏名　川畑　徹朗

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキル形成に焦点を当てた
いじめ防止プログラムの開発に関する基礎的研究

論文要旨

本研究は，「著しい逆境下にもかかわらず好ましい適応を果たす人格特性や能力」と定義されるレジリエンシー，「児童生徒を取り巻く重要な他者から得られる様々な形の援助」と定義されるソーシャル・サポート，そして「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して，建設的かつ効果的に対処するために必要な心理社会的能力」と定義されるライフスキルが，いじめ被害低減において果たす役割の違いや，三者の相互関係を明らかにし，一次予防に焦点を当てた効果的ないじめ防止プログラムを開発するための基礎的資料を得ることを目的とした．

博士論文は４章から構成される．

第１章

第１章においては，仮説１）レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルがそれぞれ高い生徒は，いじめを受けにくく，いじめを受けても効果的に対処し，影響も小さい，仮説２）レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルは，相互に正の相関を示す，について検討することを主な目的とした．

調査は，2009年６月，新潟市内の公立中学校１校に在籍する中学１年生から３年生の全生徒619名を対象に，無記名の自記入式質問紙法によって実施した．有効回答者数は583名であった．主な結果は以下の通りであった．

１）この１年間にいじめの被害を経験していない生徒は，複数の種類のいじめ被害を経験した生徒に比べて，レジリエンシー，ソーシャル・サポート，セルフエスティーム，向社会的スキル（男子のみ），目標設定スキル（男子のみ）の得点が有意に高く，好ましくない社会的スキル，情動焦点型のストレス対処スキルの得点が有意に低かった．

２）いじめの影響が小さい生徒は，いじめの影響が大きい生徒に比べて，レジリエンシー，ソーシャル・サポート（女子のみ），セルフエスティーム（男子のみ），問題焦点型のストレス対処スキル（女子のみ）の得点が有意に高く，情動焦点型のストレス対処スキル（男子のみ）の得点が有意に低かった．

３）「相談」型の対処をする生徒は，レジリエンシー（女子のみ），ソーシャル・サポート，問題焦点型のストレス対処スキル（男子のみ），意志決定スキル（男子のみ），目標設定スキル（女子のみ）の得点が高かった．

４）ライフスキルとレジリエンシー及びライフスキルとソーシャル・サポートの尺度間には有意な偏相関が多く認められた一方，レジリエンシーとソーシャル・サポートの尺度間には有意な偏相関はほとんど認められなかった．

以上の結果より，仮説１と仮説２について概ね支持されたものの，レジリエンシーとソーシャル・サポートとの関係についてはさらに検討を要する課題であると考えられた．

第２章

第２章においては，第１章の中学校１校における小規模調査の結果を踏まえ，大規模調査を実施し，新たに以下の仮説を加えて検証を行うことを目的とした．

仮説３）いじめの影響がより深刻化して行くプロセスにおいて，レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルの果たす役割は異なっている．

調査は，2009年10月から12月にかけて，新潟市内及び広島市内の公立中学校８校に在籍する中学１年生から３年生の全生徒2,751名を対象に，無記名の自記入式質問紙法によって実施した．有効回答者数は2,460名であった．主な結果は以下の通りであった．

１）単変量解析の結果によれば，この１年間にいじめの被害を経験していない生徒は複数の種類のいじめ被害を経験した生徒と比べて，いじめの影響が小さい生徒はいじめの影響が大きい生徒と比べて，さらに「相談」型の対処をする生徒はしない生徒と比べて，レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルの得点が高い傾向が認められた．ただし，第１章の結果とは異なり，「攻撃」型の対処をする生徒はしない生徒と比べて，レジリエンシーとライフスキルの得点が高い傾向が認められた．

２）レジリエンシーとライフスキル及びソーシャル・サポートとライフスキルの尺度間には有意な偏相関が多く認められた一方，レジリエンシーとソーシャル・サポートの尺度間には有意な偏相関はほとんど認められなかった．

３）いじめの被害経験を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析の結果によれば，ソーシャル・サポート「友人」，「先生」，セルフエスティーム「友人」，「家族」，「全般」がいじめの発生を抑止する変数として取り込まれ，レジリエンシーの「内面共有性」，好ましくないと考えられる社会的スキル，情動焦点型のストレス対処スキルが助長する変数として取り込まれた．また，いじめの影響を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析の結果によれば，セルフエスティーム「友人」，「家族」がいじめの深刻化を抑止する変数として取り込まれ，情動焦点型のストレス対処スキルが助長する変数として取り込まれた．

以上の結果より，仮説１と仮説２については，第１章の小規模調査と同様に，妥当であることが確認された．また，仮説３についても妥当であることが示唆された．

本研究の結果より，我が国の学校における包括的ないじめ防止プログラムの内容として，生徒のソーシャル・サポートやライフスキル，とりわけ家族に関するセルフエスティームを高めることが重要であることが示唆された．

第３章

第３章においては，小学校６年生と中学校１年生を対象とした縦断調査を実施し，小学６年生から中学１年生への移行期を中心に，いじめ被害の実態を明らかにするとともに，いじめの被害経験とレジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルとの因果関係に

ついて示唆を得ることを目的とした．

調査は，2011年２月から３月にかけて，新潟市内の公立中学校４校に在籍する１年生と，同じ中学校区にある公立小学校７校の６年生を対象に，無記名の自記入式質問紙法を実施し，2012年３月に同一生徒を対象に２回目の調査を実施した．２回の調査に回答した小学６年生373名，中学１年生403名を分析対象とした．主な結果は以下の通りであった．

１）小学６年生から中学１年生にかけて，この１年間に少なくとも１種類以上のいじめを，月に２～３回くらい，もしくは週に１回以上受けたと回答した者の割合は，小学６年生で25％（男子36％，女子15％），中学１年生で27％（男子35％，女子19％）であり，大きな変化は認められなかった．

２）2011年の第１回目の調査時にいじめの被害経験のなかった者を分析対象として，2012年のいじめの被害経験の有無によって２群に分け，2011年の調査時のレジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルの平均値を比較したところ，第１回目の調査時（2011年）に小学６年生であった者については，男子では問題焦点型のストレス対処スキルである「サポート希求」，女子ではレジリエンシーの「楽観性」とセルフエスティーム「家族」において有意差が認められ，第１回目の調査時に中学１年生であった者については，男子では情動焦点型のストレス対処スキルである「情動的回避」と「認知的回避」，女子ではレジリエンシーの「楽観性」と情動焦点型のストレス対処スキルである「認知的回避」において有意差が認められた．

３）2012年調査時のいじめの被害経験を従属変数，2011年のレジリエンシー，セルフエスティーム，社会的スキル，ストレス対処スキルを独立変数とした多重ロジスティック回帰分析の結果によれば，第１回目の調査時に小学６年生であった者については，男女とも，セルフエスティーム「家族」がいじめの発生を抑止する変数として取り込まれた．一方，第１回目の調査時に中学１年生であった者については，女子において，ストレス対処スキルの「情動的回避」のみが変数として取り込まれた．

本研究の結果より，小学６年生から中学１年生にかけての，いじめ被害の発生を防止するためには，児童生徒の家族に関するセルフエスティームを高めることが重要であることが示唆された．

第４章

第４章では，第１章から第３章までの調査結果を踏まえ，生徒のソーシャル・サポートやライフスキル，特に家族に関するセルフエスティームを高める具体的な方策として，ヘルスプロモーティングスクールの枠組に基づいたいじめ防止プログラムを我が国へ適用する可能性について検討した．

まず，ヘルスプロモーティングスクールの歴史や原理について概観した後，西オーストラリア州のEdith Cowan大学のCrossらのグループが開発した，ヘルスプロモーティングスクールの枠組に基づいたいじめ防止プログラム「Friendly Schools Plus」の全体的な構成と，具体的なカリキュラムの内容について紹介を行った．

最後に，ヘルスプロモーティングスクールの枠組に基づいたいじめ防止プログラムの，我が国への具体的な適用方法を検討するともに，併せて，導入に際して取り組むべき課題についても検討を行った．

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	菱田一哉		
論文題目	レジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキル形成に焦点を当てたいじめ防止プログラムの開発に関する基礎的研究		
判　　定	(合　格)・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	川畑　徹朗
	副　査	教授	中村　晴信
	副　査	准教授	辻本　悟史
	副　査	教授	伊藤　篤
	副　査	教授	鬼頭　英明

要　　旨

本研究は，「著しい逆境下にもかかわらず好ましい適応を果たす人格特性や能力」と定義されるレジリエンシー，「児童生徒を取り巻く重要な他者から得られる様々な形の援助」と定義されるソーシャル・サポート，そして「日常生活で生じる様々な問題や要求に対して，建設的かつ効果的に対処するために必要な心理社会的能力」と定義されるライフスキルが，いじめ被害低減において果たす役割や，三者の相互関係を明らかにし，一次予防に焦点を当てた効果的ないじめ防止プログラムを開発するための基礎的資料を得ることを目的としている．

博士論文は，序章，第１～４章，そして終章から構成される．

第１章においては，新潟市内の公立中学校１校の１～３年生619人を対象として，2009年６月に実施した質問紙調査の結果に基づいて，いじめ被害経験のない生徒は複数の種類のいじめ被害を経験した生徒に比べて，いじめの影響が小さい生徒はいじめの影響が大きい生徒に比べて，「相談」型の対処をする生徒はしない生徒に比べて，レジリエンシー，認知されたソーシャル・サポート（以下，ソーシャル・サポート），ライフスキルの得点が高いことを明らかにした．また，ライフスキルとレジリエンシー及びライフスキルとソーシャル・サポートの尺度間には有意な偏相関が多く認められた一方，レジリエンシーとソーシャル・サポートの尺度間には有意な偏相関はほとんど認められないことを明らかにした．

第２章においては，新潟市内及び広島市内の公立中学校８校の１～３年生2,751人を対象として，2009年10月から12月にかけて実施した質問紙調査の結果に基づいて，第１章の結果で得られた結果を確認するとともに，多変量解析により，友人及び先生からのソーシャル・サポート，友人，家族及び全般に関するセルフエスティームがいじめの発生を抑制し，レジリエンシーの内面共有性，好ましくないと考えられる社会的スキル，情動焦点型のストレス対処スキルがいじめの発生を助長することを明らかにした．また，友人及び家族に関するセルフエスティームがいじめの深刻化を抑制し，情動焦点型のストレス対処スキルがいじめの深刻化を助長することを明らかにした．

第３章においては，第１章と第２章で得られた知見に関して，変数間の因果関係を明確にするために，2011年２，３月に新潟市内の公立中学校４校に在籍する１年生と，同じ中学校区にある公立小学校７校の６年生を対象として第１回目の質問紙調査を実施し．2012年３月に，同一生徒を対象として第２回目の質問紙調査を実施した。２回の調査に回答した小学６年生373人，中学１年生403人を分析対象とした結果に基づいて，家族に関するセルフエスティームが，小学６年生から中学１年生にかけての，いじめの発生を抑制する要因となることを明らかにした．

第４章においては，西オーストラリア州のEdith Cowan大学のCrossらのグループが開発した，ヘルスプロモーティングスクールの枠組に基づいたいじめ防止プログラムである「Friendly Schools Plus　」の内容を概観するとともに，我が国への適用可能性について検討を行った．そして，セルフエスティームを含む好ましいライフスキルを形成し，友人，教師及び家族からのサポート感を高める具体的ないじめ防止対策として，授業でのカリキュラムに加え，学校全体あるいは家族を巻き込んだ環境づくりを含む本プログラムは，我が国においてもいじめの一次予防プログラムとして十分な効果が期待できると結論した．

本研究は，我が国の従来のいじめ対策が，もっぱら「早期発見・早期対応」という二次予防に重点が置かれてきた中で，いじめを受けにくく，仮にいじめを受けても生徒自らがその被害を最小限にとどめることを目指す一次予防に焦点を当て，ライフスキルやソーシャル・サポートを形成することの意義を明らかにし，我が国のいじめ対策の方向性について重要な手がかりを与える極めて意義のある研究である．よって学位申請者の菱田一哉は，博士（学術）の学位を得る資格があると認める．

なお学位申請者は，本論文にかかわる下記の審査付き論文を発表しており，博士学位申請の基本的要件を満たしている．

- 菱田一哉，川畑徹朗，宋　昇勲ほか：いじめの影響とレジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルとの関係－新潟市内の中学校における質問紙調査の結果より－．学校保健研究 53：107-126，2011
- 菱田一哉，川畑徹朗，宋　昇勲ほか：いじめの影響とレジリエンシー，ソーシャル・サポート，ライフスキルとの関係（第２報）－新潟市及び広島市の中学校８校における質問紙調査の結果より－．学校保健研究 53：509-526，2012

*本論文は，平成23年度日本学校保健学会の学会賞受賞論文である．